

東京、新宿、地下通路。

息畝実と雲雀うめ美が反対方向から歩いて来て、息畝が立ち止まる。

息畝「あ」

雲雀「え」

息畝「あの、会ったことがあります。あなたに。あなたはアンティゴネーを買いました」

雲雀「え？」

息畝「岩波文庫の。ね、そうでしょう」

雲雀「ええ」

息畝「私はレジを打ちました」

雲雀「ああ、本屋さんの人ですか」

息畝「そうです。バイトしてました。でも、もう、辞めました」

息畝「本を売ってる場合じゃないんです」

雲雀「あ、それじゃ、すいません」

息畝「持ってます、アンティゴネー」

雲雀「それじゃなくって、必要だったのは、新潮のほうでした」

息畝「新潮」

雲雀「ええ」

息畝「岩波文庫ではなく、新潮文庫ですか」

東京、新宿、カフェ。劇団パトリオット劇場の劇団員たちの会議。

大木桃子と劇団員たち、雑談している。

大木「今度の作品は、一人の盲目の人のためのものにしたいと思っています」

久留米「え、それはまたどうしてなの」

大木「そうでないと、アンティゴネーは上演できないと思ったし、一人の盲目の人のためであれば、アンティゴネーを上演しなければならない。これは、どちらが欠けてもいけないと思いました。ポリュネイケスとエテオクレスの二人の兄の、どちらもがとても大事なように」

久留米「誰、その、盲目の人って」

大木「まだ、わかりません」

久留米「観客は、一人でないといけないのかな」

大木「一人であることが重要です」

久留米「目が見えない人じゃないといけないのかな」

大木「ええ」

久留米「どうして」

大木「理由はわかりません」

大木「理由が必要ですか」

久留米「いや、それは、まあ、必要でしょう」

大木「私はビルの屋上で、街が暮れていくのを見ていました。昼の街と夜の街のはざまの時間。遠くに光が灯ってゆく。大きな団地があるんです。光の街」

大木「見えてしまっていることというのは、多くのものを見失っているのだと思う」

久留米「大木さんの感傷にはつき合ってもらえないよ。フジタさんが辞めて最初の舞台なんだから、いいものを創らなきゃ。ね、そうだろう」

炉粗「父上、私はあなたのものだ、あなたは常に立派な智慧を以って私を導いてくれ、私は進んでそれに従うでしょう」

久留米「そのとおりだ、ハイモン、それを肝に銘じておくがいい、万事、父親の意志に随うことだ」

吉本「私は誰かに見えるようにしか演技をしたことがありません。演劇は目の見える人のためのものです。劇は見せるためにあるのですから」

大木「雲雀さんはどう思うの」

雲雀「え、ああ、どうって」

炉粗「結婚についてもあなたの手引きにまさる相手は得られぬものと思っております」

久留米「よいか、ハイモン、一時の快樂の誘いに応じて女のために理性を遠ざけてはならぬ、何よりこれだけは知っておいてもらいたい、悪い女をわが家に迎え入れ、臥床を共にしても、それは抱きしめた腕の中で忽ち冷えてゆくに決まっている」

炉粗「父上、神々がわれわれに理性をお恵み下さいました。これ以上、貴重な、おお、シット！」
(激しく自己を叱責する)

大木と雲雀を残して去る。

大木「劇を上演することってというのは、まずは、世界との約束をするってことなのよね。いつか必ず上演されることがすでにもう条件づけられている。つまり、約束は必ず果たされる。約束を破ることは、ありえない。絶対に許されない」

大木「ビルの屋上から、遠い団地の明かりを、光の街を見ていたとき、そう思った。遠くまで見えるって、なにかが無条件に達成されてしまっている」

大木「だって、ある覚悟を持って、世の中に、私たちはアンティゴネーを上演します、って言うことは、それはもう上演しないことにはならないわけでしょう」

大木「でも、それでいいのかな。そうじゃない覚悟で、演劇ができないのかな」

雲雀「え、そうじゃない覚悟って」

大木「私たちの勝手な約束だもの、破棄したっていい覚悟よ」

大木「宣言が、約束が、どうして未来に向いてしまうのか。それでは、過去の死者への約束に

はならない」

大木「誰のための上演なのかってことよ」

息畝が新潮文庫のアンティゴネーを持って立っている。

雲雀「あ」

大木「誰」

雲雀「知らない、なんか、変な人」

東京、新宿、稽古場の近くのコンビニの前で煙草を吸っている吉本ミカに息畝実が話しかける。

息畝「パトリオット劇場の人ですか」

吉本「あ、はい」

息畝「雲雀うめ美さんはいますか」

吉本「今日はお稽古、お休みしています」

息畝「ああ。そうですか」

息畝「アンティゴネーの最初の場面ですが、海辺がいいと思います。ざざー、ざざー、ざざー、波の音がしてるんです。波の音は世界の不可解さをあらわしています。アンティゴネーとイスマネはなにもしゃべらない。ただ、海の音に耳をすましています」

息畝「波の音こそが、ここではまるで、アンティゴネーの母親の掟です。イオカステの呪いのような。ざざー、ざざー、ざざー」

息畝「雲雀さんが、アンティゴネーですか」

吉本「え？」

息畝「アンティゴネーを演じるのは、雲雀さんなんでしょう」

吉本「あ。あの、すみません」

息畝「じゃ、あなたは、イスマネですね」

吉本ミカ、その場を去る。

息畝「がんばってください」

炉粗純、ハイモンのセリフを身体にいれるためにランニングしている。

高円寺のカフェで「色山さん」と「木ノ下くん」が談笑しているのを観察している「わたし」。

色山さんと木ノ下くんの語らいを、わたしが店の外から観察している。やがて、色山さんと木ノ下くん、店を出る。わたし、商店街を歩く二人を尾行する。

高円寺、公園のベンチでいちゃつく「色山さん」と「木ノ下くん」

色山さん「蟻がいる」

木ノ下くん「蟻ぐらいいるでしょ」

色山さん「金星、結構、光ってた」

木ノ下くん「ふーん」

色山さん「あ、つくつくぼうし」

色山さん「ちょっと」

木ノ下くん「え」

色山さん「うまいでしょ」

木ノ下くん「え」

色山さん「うまいでしょ、木ノ下くん」

木ノ下くん「なにが」

色山さん「UFO キャッチャーとか」

木ノ下くん「やったことないです」

色山さん「金魚すくいとか」

木ノ下くん「めぞん一刻っすか」

色山さん「え、なんで」

木ノ下くん「たとえば、愛は、交換ではない。贈与ですよ。経済は、贈与ではなく、交換で成立している」

木ノ下くん「おれさ、ひとりでいるのがこわくなるようなたくさんの友人よりも、ひとりでもこわくないと思わせてくれる何かと出会うことのほうが、うーんと大事な気が、最近する

んだよね」

木ノ下くん「行く？」

二人立ち上がり、去る。

「わたし」、盗聴器を仕掛けたベンチで、「色山さん」と「木ノ下くん」の声を聞く

わたし、公園のベンチの下から、録音器を取り出して聞く。二人の会話が聞える。

わたし「、、、、、、、、え、くく、え。、、、、きや、ふん、、、、、、え、くさ、、、、、、ぎや、
対岸の彼女。木ノ下くんぜったい、角田光代読んでる！」

「色山さん」と「木ノ下くん」、「木ノ下くん」の部屋でセックスをした後、「木ノ下くん」が窓
を開ける。そのとき二人の姿は「わたし」から目撃される

わたし、路上から、木ノ下くんの部屋を観察している。

高円寺商店街、「わたし」が「色山さん」を尾行する

商店街、わたしが8メートルの間隔をおいて色山さんを尾行している。

国会議事堂前のデモの群衆の中、息畝実と吉本ミカが会う。

吉本「私、群衆が好きなんです」

吉本「だから、東京が好き。雲雀さんは東京が好きじゃない」

吉本「私は吉本ミカじゃなくって、東京って名前でもいいと思ってる。そういえば、あなたの名前を聞いてなかった」

息畝「息畝実です」

吉本「今度、あなたのことを雲雀さんに伝えます」

息畝「名前だけですわ。雲雀さんに伝わるのは。ぼくのこと何にも知らないでしょう」

吉本「人生は現在でしかないわね。あなたとこうして過ごすこの時間が今ですもの、受け入れるしかない」

吉本「過去のあの時、あの時間があつたってことはもうどうでもいいのよ」

吉本「あなたはなにを待ってるの」

息畝「え」

吉本「あなたは、私が、これから、なにを言うのか待っているのよ。次のセリフを」

吉本「私、イスメネが嫌いじゃない。雲雀さんは、アンティゴネーのことを考えあぐねてる。いい気味だと思うわ。私、身の丈に合った女を演じたいって思うもの」

桑原さなえが、カードを道ゆく人に差し出している。息畝にも渡す。カードに次の文字。

表「桑原さなえ」「住所不定」「kuwabarasanae@gmail.com」

裏「美しい雪、魂の国、骨の音を聞いてたなびく煙」

西新宿。稽古場への道で雲雀うめ美、大木桃子に役作りの困難さについて話す。

雲雀「私の声、お母さんの声とそっくり」

大木「ああ。母とは似るわね。女だから」

雲雀「お母さんを演じるのなら簡単なのかな。死んでも、この声に宿っているのね、きっと。それを受け継がれてるみたいにあんまり考えたくなくて、ただ、親子は似てるってぐらいで留めておきたいのね。だって、お母さんのお母さんのお母さんくらいまでさかのぼってもこの声だったら、なんかやりきれない」

雲雀「もしも、遠い祖先の母たちから電話があって、あのお母さんの声とこの声が一緒だったら、げんなりするじゃない」

雲雀「アンティゴネーって、どんな声だったのかな」

雲雀「こんな声じゃない。こんな言葉もしゃべらない。こんな顔じゃないってことだけは、確かだね」

雲雀「私、彼女のことが死ぬほど好きになってしまった。ものすごく好き。だから、こんな声で汚したくない」

雲雀「彼女は、私からはずっとずっと果てしなく遠いところにいる」

少し距離を置いたところから息畝が二人を見ている

大木「あ、あのひと」

雲雀「ああ、ずっと、いるのよ。あの距離で。名前なんだったっけ、この前、吉本さんが教えてくれたけど。なんか、よくわからなかった」

大木「いき、いき、いき」

息畝「息畝です」

大木「え？」

息畝「イキウネです！」

雲雀「生き埋め？」

息畝「ちがいます。息畝です」

雲雀、大木、稽古場へと去る。

息畝「アンティゴネーの第一幕を書き終わりました。海辺のシーンです。アンティゴネーの母への手紙から始まります。その手紙を海に投げるんです。つまり投壘書簡です。読んでください」

息畝「あ、手紙ではなく、私の戯曲を。ソフォクレスのではなく、私の書いた、アンティゴネーを」

劇団パトリオット劇場、「アンティゴネー」のリハーサルをおこなう。

休憩時間①

久留米「どうゆうこと。福島でやるって」

炉粗「東京では上演しないってことですか」

息畝が、距離を置いて、二人の様子を伺っている。

久留米「だれ」

炉粗「え、いや、わかりません」

久留米「さっきから、こっち、ずっと見てるよ」

休憩時間②

久留米「炉粗くん」

炉粗「はい」

久留米「なんで、ソフォクレスって死んだか、知ってる？」

久留米「え、知らないの」

炉粗「あ。いや」

久留米「ソフォクレスは90歳で死んだ。その死因として三つの噂が残っている。一つ、役者から花祭りに贈られた葡萄を食べ、それに咽喉を詰まらせて死んだ。二つめ、自作「アンティゴネー」を声に出して読んでいたとき、長いせりふを一息も休まず喋ってみようとして、息を切らせて死んだ」

近くにいた息畝が腹を抱えて失笑する。

久留米「その三、アンティゴネの戯曲が、競技大会で優勝したという知らせを聞いてあんまり嬉し過ぎて死んだんだそうだ」

久留米「いいかい、どれも息を詰まらせて死んだということでは一致してるんだよ」

息畝の笑いが止まらない。

久留米「知らなかったの」

炉粗「はい」

久留米「新潮文庫のあとがきに書いてあるよ」

炉粗、激しく自責の念に苛まれる。

息畝「あの、これ読んでもらえませんか」

久留米「うん？」

息畝「読んでください」

久留米「なんですかこれ」

息畝「戯曲です。アンティゴネーの第一幕です。ソフォクレス版ではなく、息畝版です」

久留米「え？」

息畝「息畝版、息畝っていうのは、私の名前です」

久留米「ああ」

炉粗「生き埋め？」

息畝「あ。違います。イキウネです」

吉本「稽古。始めます」

久留米、炉粗、稽古場へ去る。

吉本「もう帰ったほうがいいよ。だれも相手する人なんていないんだから」

息畝「う、うるさい」

大木「あ、ちょっと、トイレ」

吉本「はい」

吉本、稽古場へ去る。

大木、トイレへ。

トイレから出て来た大木に。

息畝「これ、読んでください」

大木、気付かないまま、去ろうとするのを、

息畝「じゃ、雲雀さんに渡してください」

息畝、大木に自作を渡す。

稽古の帰り道。コンビニ前で、炉粗がポーの「息の喪失」を雲雀に渡す

炉粗「雲雀さん」

雲雀「はい」

炉粗「ちょっと」

雲雀「え、はい」

炉粗「どうぞ、そこに座って」

雲雀「え、」

雲雀「で、なに」

炉粗「これ、読んでみたら」

雲雀「なに、これ」

炉粗「息の喪失っていう、ポーの小説」

雲雀「へえ」

炉粗「役作りの参考にしてください」

雲雀「ありがとう」

雲雀「あ、じゃあ」

炉粗「ああ、じゃ、さよなら」

雲雀「さよなら」

息畝が、その様子を見ている。

高円寺、および歌舞伎町、「わたし」と「色山さん」と「木ノ下くん」、四つの光景。ほとんど①②③は同時に行われる。

①「色山さん」が「わたし」からの電話に出る。

色山さん「はい、もしもし、もしもし。もしもし。嶺岡さん、どうしたの。うん、うん、うん。え、ああ。いや、うん、大丈夫。そう。うん、え、うん、外だけど。ちょっと。ああ、まあ、大丈夫大丈夫」

色山さん「あの、ちょっと、いいかな、もう」

色山さん「そんなこと関係ないから」

色山さん「あ、じゃ、もう切るね」

またかかって来る。色山さん、出ない。やっと出る。

色山さん「はい。明日になったら、普通に話せると思うから。もうすぐ、明日になるけど。いまは、ちょっと、ね、かんべんしてください」

色山さん「嶺岡さん、私が木ノ下くんの悪口言うと嬉しい？じゃ、あえてそのモードになって喋るね」

色山さん「あ、ごめん、なんかめんどくさい」

色山さん「そっちから、かけて来たんだから、なんかしゃべってよ」

色山さん「いまは、やめてね。お願いだから」

②「わたし」が携帯で語る「色山さん」への断片的な言葉。

わたし「すみません。暑いですね。いま、外です。木ノ下くんと一緒にない色山さんを見る気

にはなりません。そうです、一緒のときのほうがテンションあがります。むっちゃ興奮しますよ。いま、しゃべっていいですか。うまく言えないけど。木ノ下くんが浮気したら、色山さんが可哀想だとかは思いません。色山さんのことが憎くなる。そうやって、待ってる、色山さんが。わたしですか、いません、いません。そこには、いません。でも、色山さんは、なんとなくわかります。駅の。どちらかと言えば、南口のほうに立ってるんでしょう。いえ、見えてないですって。でも、見えるんです。ええ、木ノ下くんは、歌舞伎町のラブホです、きっと」

わたし「どうして、黙るんですか」

わたし「だから、自宅前です。鳥居が見えます。色山さんは見えません。木ノ下くんも見えませんが。部屋は暑いから出て来ました」

わたし「いいです、無理しなくて、私がずっとしゃべりますから。でも、声、録音させてください」

わたし「私、知ってますよ。色山さん、私に見られて、ちょっと、何て言うか、あ、いいです。ごめんなさい」

わたし「木ノ下くん、始発で帰って来るなんて限りませんよ。ああ、二三本待つつもりですか」

③歌舞伎町のラブホテルの前。「木ノ下くん」が若い女性と一緒に出て来る。すると、桑原さなえが来て、名刺大のカードを渡す。「木ノ下くん」は、受けとってしまう。

女「あ、いいです」

女「なんて書いてあるの」

木ノ下くん「日本語かな」

女「日本語ですよ」

木ノ下くん「手書き」

女「なんか、宗教じゃないかな」

女「一緒に行ってもいいですか」

木ノ下くん「え、あ、うん」

木ノ下くん「うち来てもいいけど、おれ、朝から、仕事だから」

④「色山さん」が高円寺駅の改札付近で始発電車を待っている。電車が来て、「木ノ下くん」と女がホームから降りて来て、駅の改札を出る。二人は別方向に別れるが、「木ノ下くん」が「色山さん」の存在に気づき、立ち止まる。そのすべてを盗撮する、「わたし」。

色山さんの絶叫。

息畝実の夢の中、日の出駅、息畝と雲雀うめ美がゆりかもめが来るのを待つ。

二人は並んでベンチに座っている。なにもしゃべらない。

ゆりかもめに乗車している二人の会話。

雲雀「これは、息畝くんの夢の中なの」

息畝「そうです」

雲雀「なんで、私も一緒に夢の中なのか」

雲雀「しかも、夢の始まりが、日の出って」

息畝「すみません」

雲雀「え、きみがあやまることはない。きみの夢だとは言っても、きみだって、夢には責任とれないでしょう」

息畝「しかし、夢にこそ、その人自身の本質が出るのではないのでしょうか」

息畝「今日は、お弁当を作って来ました。一緒に食べましょう」

お台場の海辺、アンティゴネーの上演。自由の女神が二人に背を向け立っている。

お弁当を食べ終え。

雲雀「ごちそうさま」

雲雀うめ美はアンティゴネーを演じる。

息畝「聞えません。声が聞えないです。声、もっと出してください」

雲雀、演技を中断して、口だけ動かす。息畝、読唇術。

息畝「これは、夢、よ。あんたの夢なのよ。聞こえないのは、あんたの夢のせい。あたしの声が、悪いんじゃない。って言ったんですか」

雲雀、走って去る。すると、自由の女神が息畝に告げる。

自由の女神「(ひそやかに息畝の声に宿って) おまえは彼女を背負って、海を渡れ。彼女が死者のための希望だとすれば、息畝よ、おまえは希望への渡し守だ。キリストを背負ったクリストフォロスだ」

ヴィーナスフォート内、ふたりのさまよい。

偽りの欧州、ローマのような町を二人は彷徨う。

そして、教会前の広場での二人の再会。

息畝「目を覚ますとこのことは忘れてしまうのでしょうか」

息畝「私は今この夢をどこで見ているのでしょうか」

息畝「今日が13日の午後だとすれば、眠ってる私は昨日にいるのか、明日にいるのか」

息畝「ここからは、なんにもわかりませんね。夢の中にいるほうは見られるものです。見るんじゃない。でも、そんなにいつもと変わらない気がします。特に、あなたに出会い、バイトにも行かなくなった私の生活は、誰かに見られている、それも、複数の、と言ってもほんの二三人ですけど、夢のような気がしています」

息畝「やがてこの夢にも夜が来て、私も眠りにつきます」

息畝「再び、目を覚ました時、この夢のことは忘れてしまうのでしょうか」

息畝「せめて、私のブログを読んでください。あなたのことを書いてます」

新宿駅西口、大木桃子の演説。息敵、生卵を投げつける。

大木「私は大木桃子です。劇団パトリオット劇場の代表であり、演出家です。今月の22日、私たちは福島市内でギリシャ悲劇「アンティゴネー」を上演したいと考えています。それは、たった一人の盲目の人のための上演になるでしょう。しかし、そのたった一人の盲目の人が誰なのか。なぜ、そのような前提のもとに上演するのか。理由をうまく説明できないのです。それなのに、上演日は近づいて来るのです。私たちは宣言します。これは、ボランティアでも復興支援でも善人のパフォーマンスでもありません。福島で、たった一人の盲目の人のために「アンティゴネー」の上演をする。という言葉は、というか、その一連のイメージは、気付いた時にはもう私の中にありました。あれっ、と思った時にはもう遅く、「福島、観客一人、目の見えない人、アンティゴネー」はどれも一切欠けることなく、私の中に刻み込まれてしまいました。もう後戻りはできません。唐突に、イメージとして去来して来たら最後、人間はその像をぬぐい去ることが出来ないのです。もちろん、それが強烈なもので、受信者側の人間もどうしても気になって仕方がないってときに限るのでしょうか。その張り付き具合の強度は相当大事です。根拠がわからないことが不安ではなく、すでに今の私自身がどうしてこんなにも強烈に、そんな思いに駆られてしまっているのかがわかりません。理由もなく私がここにあり、この世界があることと同じです。いま、ここに、私が入り、みなさんがいることにどんな理由があるのでしょうか。「人間」なんて言いかたして、私の内面のことなのに、安易に一般化してしまいました。すみません。ぼんやりしていたマクベスが魔女の「お前はダンカン王を殺すことになる」という予言に苛まれることと近いような気もします。だけど、マクベスはそれを実行しました。私たちは、この不可能なる上演を実行できるのか、まだわかりません。上演日は今月の22日なのでありますから。あ、そうです、「私たち」と言いました。まったくの私固有の出来事だったこの「福島で、たった一人の盲目の人のために「アンティゴネー」の上演をする。」っていう思いが、リアリティーを持って立ちあらわれるためには、他者の承認が必要でした。承認されないにせよ、私だけの思いでは、ほんとうのことにはならないように思えたのです。内側を外に吐き出したかった。だから、思い切って、劇団のみんなにも打ち明けました。そのときからです。そのときから、この上演は私だけの単なる取り返しのつかないイメージであることをやめ、実現にむけてのこの世界の現実としての取り返しのつかなさになったのです。そして、この演説もそのためにあります。この上演が、この世界の現実としての取り返しのつかなさだっということが、みなさんにはわかりますか。演劇はなぜ上演の日と場所を約束するのでしょうか。上演日はなぜ、未来にあるのでしょうか。彼女の結婚のことを思い浮かべます。そう、あの彼女、私たちが日々向き合おうとしている「彼女」。彼女の名前は、アンティゴネーです。普通、婚礼は未来に予定されます。しかし、アンティゴネーの婚礼は過去の死者たちとのものでした。

愛するハイモンとの結婚を断念し、死んだ兄、ポリュネイケスに連なる全ての死者たちと臥所をともにする覚悟で死にました。死ぬことこそが過去の死者との結婚でした。というより、死者は無時間です。過去も未来もない。生きている私たちがかろうじて触れられるのは、生き埋めの時間だけだったのです」

息敵、野次る。そして、「違う！私は生き埋めではなく、息敵だ！」と言って、大木に生卵を投げつける息敵、逃げる。炉粗に取り押さえられる。

パトリオット劇場出発の日、上野駅前広場。

劇団員、福島行の列車に乗るために集まって来る。

離れた場所に、息畝実が立っていて、そこへ吉本ミカが近づく。

吉本「愛は重荷になると思うのよ。だって、愛は憎しみに化けたりするでしょう」

息畝「あっちへ行け。凡人には用はない」

吉本「もっと、軽い感じでいこうよ」

息畝「うるさい」

吉本「でないと、雲雀さんだって困るし、私たちも迷惑よ」

息畝「しっしっ。大根役者！」

吉本「愛は貪り合う。愛は分け隔てる。キリストだって、隣人を愛せよ、って言ったけど、聖書のなかの言葉だって、まあまあ嫌うことなく親切にしなさいってぐらいのことだったと思うわ」

吉本「愛なんてこと言い出すから、ややこしいことなるのよ」

息畝「アンティゴネーは二人の兄の両方と愛を分け合うんだ。憎しみではない」

息畝「アンティゴネーの愛は簡単に憎しみに転ずるような弱いものじゃない」

息畝「膨大な量の、数えきれない死者たちのほうへ」

息畝「ぼ——————っ」

息畝「雲雀さん、いまのが聞えましたか。き、き汽笛です。た、た旅の始まりです」

劇団員たち、改札の向こうへ。息畝には乗車するための切符がないので、取り残される。

夜、福島市の繁華街、クラブ「AS SOON AS」で、劇団員たちの会話。

パトリオット劇場の劇団員、雑談している。

息畝「私は、知っているぞ」

久留米「だれ」

吉本「大木さんに卵ぶつけた人です」

息畝「おい。お前」

息畝「お前だ、お前」

息畝「眼鏡の演出家！」

大木「大木です」

息畝「私は知っているぞ」

大木「なにを知っているのです」

息畝「知っていることを知っていると言って何が悪い」

吉本「相手にしないことですよ」

息畝「な、なにお一、ちえっ、機関車トーマスみたいな顔のくせに」

泥酔の息畝実、醜態を晒す。

阿武隈川の岸边。

大木「誰かに見られている。そういう意識を持って、演じてください」

雲雀うめ美と吉本ミカが、アンティゴネーとイスメネの対話を上演する。
対岸には、息畝実、二日酔いなのか、ゲロを吐く。

福島市内の繁華街の路地① アンティゴネーの卒倒。

大木「誰かからの眼差し。それは盲目の人からの眼差しなのです」

息畝「いいかげんなことを言うな」

久留米冬季と雲雀うめ美と吉本ミカが、クレオン、アンティゴネー、イスメネの会話を上演する。

クレオンの命令で、アンティゴネーとイスメネは市民に取り押さえられる。

それを、ふりほどき、アンティゴネーはしばらく歩き、卒倒する。

福島市内の繁華街の路地② 息畝の失笑。

久留米冬季と炉粗純、クレオンとハイモンの対話を上演する。

そばで、息畝実が腹をかかえて笑っている。

久留米「おい、こら、笑うな！」

大木「久留米さん、クレオンを演じてください」

嘆きの地下道 探す息畝の地上。

地下道、アンティゴネーが一人、嘆きのセリフを語りつつ、雲雀うめ美が泣いている。
つまり、アンティゴネーでありながらも雲雀うめ美として涙するということだろうか。

息敵は、地上で雲雀を必死で探す。
それを見て、劇団員たちが笑っている。
大木桃子がそれをたしなめる。

福島駅東口、中合前にてパトリオット劇場の劇団員と息敵実が自民党の総裁選の街頭演説を見る。

信夫山、展望台。夜景の街。

パトリオット劇場の劇団員たち、福島市内を眺める。

大木「みなさん、おつかれさまでした。東京に戻りましょう」

劇団員たち、下山する。

福島駅前事件、勃発。

駅前の広場。列車に乗るべく。急ぐ劇団員たち。

息敵「お前らは演出家のあやつり人形か」

息敵「お人良しのお前たちに私が敢えて教えを垂れるぞ。お前たちの言う一人の盲目の人というのは、オイディプスのことだ。いや、それだけではなく、それは、今は亡きあの演出家の父からの眼差しにすぎない。アンティゴネーは、大勢の、無名の、死者たちとともにあるのだ。私はアンティゴネーの占有を許さない」

息敵「私は、オイディプスの呪縛から解き放たれる。さようなら、ソフォクレス。雲雀さん、

これが、息畝版アンティゴネー第二幕です」

差し出す原稿は雲雀へ。

だが、息畝は、久留米と炉粗から法外な暴行を受ける。原稿が舞い散る。

大木「やめてください。私たちの列車に乗り遅れます」

古関裕而の音楽。

東京へ戻る新幹線の中のパトリオット劇場の劇団員たち

劇団員たち、無言。俳優たちは、「アンティゴネー」の登場人物から次第に解放される。

阿武隈急行線・福島駅前、息畝、桑原さなえを尾行する。

息畝実があてどもなく歩いている。

白い服の女を見かける。桑原さなえ。

桑原は阿武隈急行の乗り場の改札をぬけて、ホームのほうへ行く。そして、列車に乗る。息畝、あとをつける。

桑原さなえは、「保原」という駅で降りる。

そして、バスに乗る。息畝は尾行する。

桑原さなえは、伏黒診療所前で降り、仮設住宅のほうへ行く。息畝もそれを追いかけるが、見失う。たくさんの同じサイズの住宅が建ち並んでいる。そのうちの一軒の家の前にいた女性に話しかける。

息畝「あの、すみません。このあたりを白い服を着た女性が通りませんでしたか」

女性は、知らない、と言った。

息畝実、仮設住宅の女性に質問する。

ここはどこなのか。

どこから来たのか。などを、息畝は女性に訊ねる。

高円寺、「わたし」はアークワーホテルで変装し、「色山さん」のことを激しく妄想する。

601の部屋で「わたし」は変装する。カツラを装着し、付け髭をし、ロングコートを着る。そして、かつて「色山さん」が眠ったことのあるベッドの上で妄想に耽る。

その格好のままヴェランダに出て来る。

そして、以下の場面のように妄想は現実化する。

「わたし」の妄想の中で「色山さん」が「木ノ下くん」の家のキッチンで「木ノ下くん」を殺す

「木ノ下くん」の家のキッチン。「色山さん」が包丁を持ってうなだれている。血だらけの床には、「木ノ下くん」の死体がある。

やがて、変装した男のような女のような「わたし」が「色山さん」を後ろから抱きしめる。そして、「振り向いちゃいけません」と、耳元に囁き次のセリフを言う。

わたし「色山さん。助けにきました」

そのとき、ホテルのベッドに横たわる「わたし」は強い快感に襲われたはずなのであった。

翌日、高円寺。お昼休みに「わたし」と「木ノ下くん」がカフェで語らう。そこに、「色山さん」が、歩いて来る。

わたし「秋らしくなったね」

木ノ下くん「もう、涼しいよね」

わたし「半袖のくせに」

わたし「空が高いね」

木ノ下くん「雲が秋っぽい」

わたし「あは、あきっぽいのは、あんたじゃね」

木ノ下くん「え？」

わたし「いや。いや」

「色山さん」が路地を歩いている。

わたし「あ。色山さん」

色山さん「お昼から、行きます」

わたし「そうですか」

「色山さん」は空いた座席にすわる。

木ノ下くん「なにがいい？」

色山さん「ああ、じゃ、カフェオレで」

「木ノ下くん」カフェのカウンターへ行き、「色山さん」の注文をする。

「わたし」、鼻の下に付け髭をつけて、「色山さん」を見つめる。

色山さん「え。なに、それ」

わたし「あ、いや。いや」

「わたし」、「色山さん」の顔が和んだので、ちょっと、うれしい。

息畝実が福島市内のカフェで、息畝版「アンティゴネー」の第三幕を執筆する

息畝、力を込めて書いている。書かれた文字は声になる。

息畝「息畝版アンティゴネー、第三幕。南相馬市内の街路。古い、廃墟のような映画館。人々が招き込まれるようにやって来て、座席に座る。男がスクリーンの前の舞台に現れる。男は、映画監督だ。男の名前は息畝実。座席に座らされた人々はどうしてこんなところに自分がいるのか等の不満を口々に述べている。息畝はその聴衆に向け語る」

息畝「息畝、みなさん、みなさんは、何故、ここに座って、このスクリーンと私を前にしているのか、わからないでしょう。なぜなら、これは、私の書いた戯曲の中だからです。その戯曲はいま、福島のカフェで書かれています。書いているのは、ソフォクレス以来の天才劇作家としての息畝実という私で、ここにいるのは、パゾリーニ以来の奇才映画監督としての息畝実という私です。つまり、あなたがたは私の頭の中にいるのです。これから、あなたがたには、私の映画の登場人物になってもらいます。要するに俳優さんたちですね。客席の、そのあたりにいるのが、パトリオット劇場という東京の劇団の劇団員たちです。彼らは先日、福島市内でアンティゴネーの上演をしましたが、見るに耐えないものでした。もちろん、私も見ましたが、アンティゴネーをヘーゲル的父権性へと解釈し直すという旧態依然とした無意識の働く上演でした。はい、そこの人、立ってください。彼女は大木桃子さん。劇団の代表であり、演出家です。東京にいた頃の私から卵をぶつけられました。ぷっ。そのとなりに並んですわっているのが、雲雀うめ美さん、吉本ミカさん、炉粗純さんです。どいつもこいつも大根です。はい、拍手。東京からこんな遠くまで、ありがとう。大木さんをふくめ、あなたがたを、私の息畝版アンティゴネーで蘇らせてあげましょう。じゃ、大木さん、座ってください。えっと、あのあたりにいる白い人、その人は、誰彼と見境なく、名刺を配る住所不定の女性、桑原さなえさん。彼女には占い師、テイレシアスを演じてもらいます。すくなくとも、彼女の後を追って、ここまで来たのですから、私は、ただ、彼女の予言の道筋をなぞっているのかもしれませんが。それから、ちょっと、みなさんからは、離れて座っている人がいます。あなたです。あなた。お名前は。色山さん、色山です、息畝、色山さんです。どちらにお住まいですか、色山さん、東京の、高円寺です。息畝、そうですか。どうして、ここにいるんですか。色山さん、私が聞きたいぐらいです。息畝、そうなんですか。では、教えましょう。私は、東京で一番不幸な女がここに来るように頭に思い浮かべました。そしたら、あなたがここにいたというわけです。どうですか。色山さん、どうですかって、なんですか。息畝、東京で一番不幸な女として、ここにいる感想です。色山さん、包丁があったら、あなたを刺し殺します。息畝、そんなことはでき

ません。ここに招かれた誰もが、私の書いた戯曲通りの行動しかできないのですから。あなたには、雲雀さんと吉本さんが演じる、芋名賀りえと芋名賀きえが営む喫茶店の常連客を演じてもらいます。そうです、雲雀さんと吉本さんは、この町に住む芋名賀姉妹を演じるわけですが、二人はある晩、雷にでも打たれたかのように、自分たちがアンティゴネーであり、イスメネであることに目覚めるのです。ええっ、私たちって、オイディプスの娘たちじゃない？っていう具合に。運命的に、えええっ！ぴかーっ、みたいな感じです。ははっ。そして、炉粗純、立て。立てって。よし。お前は、ハイモンだ。いいか、おれはお前に、ハイモンをやらせるぞ。うれしいか。でも、ハイモンは、野馬追の競技場で、走り回った揚げ句、狂い死にすることになる。それを、今から書くから、承知しろよな。大木、私は、なにを演じるのですか。息畝、大木さん、あなたは、演じることはありません。ただの観客です。観客になって、いかに自分の演出があさはかであったかを思い知るのです。そして、この息畝版のすばらしさも。ふふふっ。最後まで、この劇を、ただただ、見とどけることがあなたの使命です。色山さん、桑原さん、そしてパトリオット劇場のみなさん、全く面識のない他人とはいえ、私の映画への出演、感謝します。ありがとうございます。さて、この映画の、試写／死者をこれから見ましょう。試しに写すと書いて、試写です。死んだ人という意味でも、死者です。関係者のみで上映される試写のことをゼロ号プリントの試写ともいいます。まさに正真正銘の、世界で初めての映画のシシヤなのです。私たちは、死んでいった人たちを決して見ることはできません。まだ、撮影されていない映画の試写も当然不可能です。でも、もうすぐ、不思議なことに、このスクリーンで上映されます。一台のカメラさえもなく、私の、この目のみで、撮影された、盲目の映画なのです。そして、その完成されることのない映画こそが息畝版アンティゴネーという戯曲の上演なのです。数秒の間があいて、映画館の明かりが消える」

息畝、書くのを止め、頭をかかえ、苦しむ。

福島駅前、南相馬行きのバス停

桑原さなえが列に並んでいる。その後方に、息畝実も立っている。

やがて、バスが来て、乗客たちは乗り込む。

南相馬行きのバスが、飯舘村にさしかかったところで桑原さなえは語り出す

桑原「あなたは本当のところ、こんなお芝居なんてどうでもよかった。最初に雲雀うめ美に遭ったとき、いきなり抱きしめたかっただけなのだけどそんなことはできなかった。だって、本屋の店員がお客にそんなことをしたら大変なことになると思ったから。でも、そうしていれば、悲劇のままだったけど、新宿の地下通路で彼女との再会を果たしてしまった。これが喜劇の始まり。悲劇の反復は、喜劇だって、マルクスも言っている。いまだって、あなたは雲雀うめ美を抱きしめたい抱きしめたいって思っている。これが、喜劇じゃなくてなんでしょう。その気持ちをひた隠しにして、アンティゴネーだなんだって回りくどい似非インテリ気取りなんだわ。あのときの、最初の出会いの抱きしめの失敗がひきのぼされにのぼされて、こんな馬鹿げたお芝居が持続しているのね」

息畝「ああ。ほら、ここは、窓からみえる風景は、飯舘村。あの仮設住宅のおばさんのふるさとです」

桑原「もうひとつ、あなたが隠していることをあからさまにしてあげるわね。私はだって盲目のテイレシアス、あなたのことはお見通しの役目を演じなければならないのだから。あなたは、雲雀うめ美を、南相馬に住む芋名賀りえにしてアンティゴネーを演じさせようとしている。誰もが忘れてしまいたい町、放射能に汚れた町。そこに彼女を住ませることで、彼女の弱みを握りたかった。東京の女より、誰も知らない地方都市の女のほうが、抱きしめやすいし、抱きしめがいがあるって思った。好きな女に負い目を与える卑怯な奴。結局、上から視線なのね、あなたの演劇も恋も」

息畝「恥。私たちが恥とともにあることを自覚すること。そして、雲雀さんの顔、芋名賀りえの面影を思い浮かべながら、ペッピーノ・ディ・カプリのロベルタを聴くのだ。歌詞はわからなくとも」

息畝、iPhone で、音楽を聴く。車窓には、人間が住めなくなった自然いっぱいの風景。

南相馬市内、映画館「朝日座」にて

古い、廃墟のような映画館。人々が招き込まれるようにやって来て、座席に座る。男がスクリーンの前の舞台に現れる。男は、映画監督だ。男の名前は息畝実。座席に座らされた人々はどうしてこんなところに自分がいるのか等の不満を口々に述べている。息畝はその聴衆に向け語る。

息畝「みなさん、みなさんは、何故、ここに座って、このスクリーンと私を前にしているのか、わからないでしょう。なぜなら、これは、私の書いた戯曲の中だからです。その戯曲は10月9日に、福島のカフェで書かれました。書いたのは、ソフォクレス以来の天才劇作家としての息畝実という私で、ここにいるのは、パゾリーニ以来の奇才映画監督としての息畝実という私です。つまり、あなたがたは私の頭の中にいるのです。これから、あなたがたには、私の映画の登場人物になってもらいます。要するに俳優さんたちですね。客席の、そのあたりにいるのが、パトリオット劇場という東京の劇団の劇団員たちです。彼らは先日、福島市内でアンティゴネーの上演をしましたが、見るに耐えないものでした。もちろん、私も見ましたが、アンティゴネーをヘーゲル的父権性へと解釈し直すという旧態依然とした無意識の働く上演でした。はい、その人、立ってください。彼女は大木桃子さん。劇団の代表であり、演出家です。東京にいた頃の私から卵をぶつけられました。ぷっ。そのとなりに並んですわっているのが、雲雀うめ美さん、吉本ミカさん、炉粗純さんです。どいつもこいつも大根です。はい、拍手。東京からこんな遠くまで、ありがとうございます。大木さんをふくめ、あなたがたを、私の息畝版アンティゴネーで蘇らせてあげましょう。じゃ、大木さん、座ってください。えっと、あのあたりにいる白い人、その人は、誰彼と見境なく、名刺を配る住所不定の女性、桑原さなえさん。彼女には占い師、テイレシアスを演じてもらいます。すくなくとも、彼女の後を追って、ここまで来たのですから、私は、ただ、彼女の予言の道筋をなぞっているのかもしれませんが。それから、ちょっと、みなさんからは、離れて座っている人がいます。あなたです。あなた。お名前は」

色山さん「色山です」

息畝「色山さんです。どちらにお住まいですか」

色山さん「東京の、高円寺です」

息畝「そうですか。どうして、ここにいるんですか」

色山さん「私が聞きたいぐらいです」

息畝「そうなんですか。では、教えましょう。私は、東京で一番不幸な女がここに来るように頭に思い浮かべました。そしたら、あなたがここにいたというわけです。どうですか」

色山さん「どうですか、なんですか」

息畝「東京で一番不幸な女として、ここにいる感想です」

色山さん「包丁があったら、あなたを刺し殺します」

息畝「そんなことはできません。ここに招かれた誰もが、私の書いた戯曲通りの行動しかできないのですから。あなたには、雲雀さんと吉本さんが演じる、芋名賀りえと芋名賀きえが営む喫茶店の常連客を演じてもらいます。そうです、雲雀さんと吉本さんは、この町に住む芋名賀姉妹を演じるわけですが、二人はある晩、雷にでも打たれたかのように、自分たちがアンティゴネーであり、イスメネであることに目覚めるのです。ええっ、私たちって、オイディプスの娘たちじゃない？っていう具合に。運命的に、えええっ！びかっ、みたいな感じです。ははっ。そして、炉粗純、立て。立てって。よし。お前は、ハイモンだ。いいか、おれはお前に、ハイモンをやらせるぞ。うれしいか。でも、ハイモンは、野馬追の競技場で、走り回った揚げ句、狂い死にすることになる。それは、もう10月9日にテキストにすでに書いたから、承知しろよな」

大木「私は、なにを演じるのですか」

息畝「大木さん、あなたは、演じることはありません。ただの観客です。観客になって、いかに自分の演出があさはかであったかを思い知るのです。そして、この息畝版のすばらしさも。ふふふっ。最後まで、この劇を、ただただ、見とどけることがあなたの使命です。色山さん、桑原さん、そしてパトリオット劇場のみなさん、全く面識のない他人とはいえ、私の映画への出演、感謝します。ありがとう。さて、この映画の、試写／死者をこれから見ましょう。試しに写すと書いて、試写です。死んだ人という意味でも、死者です。関係者のみで上映される試写のことをゼロ号プリントの試写ともいいます。まさに正真正銘の、世界で初めての映画のシシャなのです。私たちは、死んでいった人たちを決して見ることはできません。まだ、撮影されていない映画の試写も当然不可能です。でも、もうすぐ、不思議なことに、このスクリーンで上映されます。一台のカメラさえもなく、私の、この目のみで、撮影された、盲目の映画なのです。そして、その完成されることのない映画こそが息畝版アンティゴネーという戯曲の上演なのです」

数秒の間があいて、映画館の明かりが消える。

暗闇のなかで、映写機の回る音が聞える。

南相馬市街地、芋名賀姉妹の営む素人風喫茶兼スナック（ちょっと親父に媚び売る系）で、芋名賀姉妹が客から尻を触られる

芋名賀りえときえ姉妹が、甲斐甲斐しく働いている。色山さんがいかにも常連客風のふるまいでコーヒーを「いつものくださーい」と注文する。

きえ「あ、はい。ホットひとつお願いします」

りえ「はーい」

なごやかな雰囲気店内の談笑が続く。

妹のきえが色山さんにコーヒーをこぼす。愛嬌をふりまいて、ごまかしつつ、色山さんが「だいじょぶだいじょぶ」と言っているのをきえは額面通りに捉えて、「ごめんなさーい」とコーヒーカップを片付け、テーブルを拭く。

きえ、鼻歌。

色山さん「あ。あの、コーヒーは」

きえ「あ、コーヒーおかわりくださーい」

りえ「はーい」

色山さん「おかわり？」

色山さん、腑に落ちない。

隣のテーブルでジャンプを読んでいた作業服の男がきえの尻を触る。

きえ「きゃー」

姉のりえが奥の厨房から血相を変えてやって来て。

りえ「あんた、いま、なにをした」

作業服「え。いや」

りえ「うちの妹になにをした！」

作業服の男、ジャンプを読んだまま、無視。りえ、作業服の男の頬を平手打ち。

りえ「出て行け。二度と、うちの店の敷居をまたぐな！」

作業服「なんだよ、なんでだよ。いつもだったら、なんにも言わないだろ。なんで、今日にかぎって、そんなことを言うんだよ」

作業服の男は、りえから店を追い出される。

外からは中の様子を見ている、映画監督の息畝実と観客の大木桃子。

雲雀ヶ原の祭場で、炉粗純は息絶える

広大な祭場で炉粗純がハイモンとして嘆き苦しんでいる。

映画監督の息畝が、観客席からメガホンで演出する。傍らには、観客の大木桃子。

監督「よーい。スタート」

ハイモン「あ、アンティゴネー！」

監督「カット。もう一度」

観客「もうやめて！」

監督「よーい。スタート」

ハイモン「あ、アンティゴネー！」

監督「カット。もう一度」

観客「もうやめて！」

監督「よーい。スタート」

ハイモン「あ、アンティゴネー！」

監督「カット。もう一度」

観客「もうやめて！」

監督「よーい。スタート」

ハイモン「あ、アンティゴネー！」

監督「カット。もう一度」

観客「もうやめて！」

巨大な土地で、豆粒のような三人の人間がこれをくり返す。

その夜、芋名賀姉妹の家、居間

芋名賀りえと芋名賀きえが食卓で食事をしている。部屋の片隅には、息畝と大木。

息畝監督「はい。そこで、りえの箸がとまる」

りえ「うん？」

きえ「どうしたの」

りえ「え、あ、いや。なんか、私たちにも、兄さんがいたんじゃないかって、思ったものだから」

きえ「ふーん。どうしたの急に」

ふたり、食べ続ける。

りえ「そうそう。そういえば、お母さんが、言っていた。お母さんが死ぬ、前の晩だったと思う。お前たちのほかに、生まれてすぐに死んだ、息子がいたって」

りえ「おひげが一本、すーって赤ちゃんの頬のあたりに生えていたって」

きえ「おひげってというか、産毛でしょ」

りえ「お母さんは。おひげって言っていたから」

南相馬市街地、放射線モニタリングポストのある小さな公園

ベンチに座っている息敵。ブランコにいる色山さん。少し離れたところにすわっている大木桃子。

息敵「この宇宙にあっては、「さみしさ」を病んでいるのが常態であって、それ以外の場合は考えられないからである。あるいは、もっと言えば、我々の宇宙を宇宙たらしめているそれが、「さみしさ」とその法則性であるかもしれない。我々はその法則性と通じることによつてのみ、その宇宙の深みを垣間見ることが出来るのかもしれないのである。ともかく、空間的な概念の中にあっては、ひとつの病気であり、衰弱の表徴でしかない「さみしさ」が、時間的な概念の中にあっては、ひとつの力であり、智恵なのだ」

色山さん「これはなんですか」

大木「それは、モニタリングポストです。放射能の値を調べます」

色山さん「放射能の値？」

大木「その数字が放射能の値です。空間線量です」

色山さん「(その数値を読む。数字が声になる)」

色山さん「私は郷愁を感じています。ああ、私の遠いふるさと。お星さま」

色山さん「なぜか、さみしさを感じていても、東京にいるときのさみしさではないのです」

色山さん「これを見ていたら、かつて私が住んでいた星のことを思い出したのです」

色山さん「ああ、私のお父さん。私の故郷のお星さま、そのとき私のお父さまは、たとえば白いポストのよう」

色山さん「数字でお手紙書いて、天のお空に届けます」

深夜、芋名賀姉妹の家、寝室の布団。りえときえ、寝言で重大な事実を告白する

深い眠りについたりりえときえ、急に寝言を言い出す。

きえ「あ、アンティゴネー、そんなことは、おやめになって」

りえ「い、イスメネ。わたし、クレオンなんか怖くない。お、お兄さまを弔って、あの世の掟に、従います」

りえ「あ。あの世の人と、け、結婚しました」

きえ「わたしはやってないのに、やったっていいますわ」

りえ「あ、ああ、お墓」

再び、芋名賀姉妹は深い眠りにつく。

枕もとには、息畝監督と大木観客。

朝、芋名賀姉妹の家。りえときえ、アンティゴネーとイスメネになって目覚める

りえ「イスメネ。私はアンティゴネー」

きえ「アンティゴネー。私はイスメーネー」

りえ「ああ、いとしい妹。おめかししなきゃ」

きえ「ああ。かなしいお姉さま。お化粧しなきゃ」

ふたりは、朝の身支度をする。

傍らには、息畝監督と大木観客。

南相馬の海辺、息畝版「アンティゴネー」の上演。それを見届ける大木桃子。

海辺。この辺りには何もない。ここではただ波の音だけが聞こえる。

アンティゴネーとイスメネが現れる。アンティゴネーの手には手紙の入った壘が握られている。二人は何もしゃべらない。ただ波の音に耳を傾けている。

アンティゴネー「ねえイスメネ、あなたは私がお母様に似ていると思いますか。」

イスメネ「さあ、どうかしら。お母様は随分前にお亡くなりになったのだし、私には分かりませんわ、お姉様。」

アンティゴネー「そうね。でも私、最近思うのよ。私の声は紛れもなくお母様の声に似ているって。」

イスメネ「そうかしら。でも親子ですもの、声が似るぐらい何の不思議ありませんわ」

アンティゴネー「親子。そうだわ。あなたの言うとおりかもしれないわね。」

イスメネ「親子、その言葉こそ私たちの運命を狂わせ、禍いを招いたものだったわ」

アンティゴネー「でも親子は親子よ。誰か他の代わりなんて存在しないのよ、これはあの世でも変わりはないこと」

イスメネ「この世ではお姉様がいなくなったあと、私は一人」

イスメネ「両親や兄弟に次々と災難や不幸が降り注いで亡くなっていったのを見届けて、ただ一人残った私の身の丈にあった生活とは一体どんな生活なのでしょう。あげくに、お姉様のお亡くなりになったあとも、私ひとり生きていかななくてはならないなんて。」

アンティゴネー「でも、あなたの道は生きることにあるのよ、イスメネ。いとしい妹」

アンティゴネー「波の音が他人事じゃないわ」

アンティゴネー「ここが世界の入口のようね」

アンティゴネー「この世界において死者は過去に死んだ人、でも死者にとっては、そんなの当てはまらないのよ。」

イスメネ「お姉様は生きながらにして、すでに黄泉の国の住人になられたのね。」

アンティゴネー「みんな私を喜んで迎えてくれるのよ」

イスメネ「お母様の気配がする。この海から。お母様はずっと呪っている。あの世から。自らの愚かな宿命を。そして、この世界の全てを」

アンティゴネー「この海に宿っているのね、お母様が」

イスメネ「ねえ、お姉様、お母様をやってみせて、声が似てるならできるはずよ。さあ、やってみて」

アンティゴネー「む、無理だわ」

イスメネ「宿ってるわ。宿ってるのよ、お母様が。お姉様のその声のなかに。」

アンティゴネー「私の声にも宿ってるのかしら」

アンティゴネーが母を演じる。

アンティゴネー「ああ、お母様。イオカステ」

アンティゴネー、静かに手紙の入った壺を海に投げる。

手紙の文面「お母様。私の母、一つ身に夫によって夫を生み、子によって子を生むという宿命を背負われ、その宿命の臥床を嘆いて死んだ人、イオカステ。今こうして私はお母様に向けて手紙を差し出します。お母様が亡くなられてから幾許かの月日が流れました。この手紙を受け取ったお母様は私に何を話されるのでございましょうか。お母様が知っている私は、いつの私なのでしょう。私は自ら選んでお母様のもとにやってまいりました。生きていた世界で花嫁にならず、母親にもなることなく、こちらの世界の人々の花嫁となり臥床を共にする道を選びました。ここでの時間は、生きていたときの時間よりもうんと長いのでしょうか。何も気にすることは無いのですね。お母様、ずっとお会いしたかった。私は、生きたまま岩穴の洞窟に埋められて、惨めな姿で亡くなりました。でも私の死出の旅をお母様もきっと歓迎してくれているでしょう。アンティゴネー」

アンティゴネーとイスメネは壺の行方を見届け、再び波の音に耳をすましている。